

動物と人間のあいだ 哲学的視点から

檜垣立哉*

研究ノート

Between Human and Animal, from the point of the view
of the Philosophy

Key Words : philosophy body, animal, humanity



人間と動物とは何が違うのかという問題は、人間とは何かという哲学の問いの、古くてあたらしいひとつのヴァージョンである。進化論が一般的に、少なくとも学問的世界では受け入れられ、なおかつ私が人間であることとは何かを問うときに、こうした問題につきあたるのは避けがたい。人間は動物であるが、さりとて動物と人間にはどこかおおきな違いがある。何がそれを規定しているのか。

ここですでに問いは二つにわかれている。ひとつは、動物と人間との差異を巡るものである。それは、紛れもなく哺乳動物であり霊長類であるにほかならない人間という種の、その固有な特性を問うものであるだろう。そしてもうひとつは、私という存在が、それでも動物的存在者であることの意義にかかわるものである。

この二つの問いは類似しているようで、実際絡みあっているのだが、かなり異なっている。

第一の問いは、いってみれば人間という種に特有な属性や能力の問いである。動物には言語はない。動物には社会はない。動物には芸術はない。いや、もちろん、ある種の言語、ある種の世界、ある種の芸術はあるといえるだろう。だが動物には、人間のそれのように、文字や音声を独立して分類せざる言語は確かにない。社会に類似したものはあるが、いわゆる法に支えられた国家はない。芸術的な事例

は自然界に多々存在するが、みずからの意志において芸術を創作することはない。進化的にみて、人間の諸特性の萌芽は霊長類のさまざまな動物にみいだしうるし、そこに一種の連続性を設定することも理があるだろう。だが両者のあいだには、やはり本質的な違いがある。

この問いは突き詰めていけば、人間とロボットの差異、つまりは人間的なものと機械的なものとの差異を考慮することにもかさなっていく。人間が人間であることを考えるとき、どこかで知性的な能力がおりこまれている。それは動物／人間のあいだの、接近することはするが分離する境界線の意味を把握することによってしか個別に精緻化できるものではない。ロボット研究と動物研究とはいつも表裏一体になるとおもわれる。

さて、第二の問いは少し方向を異にしている。ここでは私と動物という問題が提起されるからである。ここで問題は人間の特性一般にあるのではない。ある運動する個体をもつ私性こそが問われているのである。

動物に私があるのかという問いは、やはりきわめて重要な問いである。他方で、私の私性を考えるとき、一般的には動物にはないとおもわれがちな、人間の意識的な精神性を想定することが多い。そのときに私は、人間のあれこれの性質（さきに上げたかぎりでは言語、社会、芸術）とはかかわりなく、私が私であるという意識をもっていることが重要になる。もちろん、こうした意識と、言語や社会性や芸術的想像力とは連関している。だがここでは、個別の能力ではなく、それをとりまとめる自己意識なるものが問題視されるのである。

この先にあるのは、いわゆる心身問題と伝統的にいわれてきたものである。ヨーロッパの哲学の流れのなかでは、心的なものと身体的なものを区分し、



* Tatsuya HIGAKI

1964年5月生
東京大学大学院人文科学研究科博士課程
中途退学 (1992年)
現在、大阪大学人間科学研究科 教授
博士(文学・大阪大学) 哲学・現代思想
TEL : 080-4398-1421
E-mail : higaki@hus.osaka-u.ac.jp

そのあとで心的なものの方に自己であることの本質を付すことが多い。確かに心と身体という区分をなせば、そこでは心の方に私のあり方が宿っているようにおもわれる。その場合、私ではない身体とは動物的なものなのだろうか、機械的なものなのだろうか。先に、動物／人間の境界線としてあげていたさまざまな事例というのは、単純に心に付されるとしていいのだろうか。これはきわめて曖昧な事例になる。動物はたんなる機械ではないからだ。

もちろん動物／人間の切断線を一種の知性にみるならば、人間の特性は心や意識の側にあると考えるのが正当だろう。しかしここでもことは複雑になる。音声や字を本質とする言語、社会体としての組織、まさに感性的な身体性を軸とする芸術にとって、身体が重要でないはずなどないからだ。だからそこでは身体と精神を明確に切り分けられるという、それ自身は十七世紀からずっと展開されてきた考え方（むしろそこでは身体は単純に機械であると想定される）は問いなおされることになる（それゆえ動物性としての身体の地位はせりあがってくる）。

こうした区分の揺らぎは二〇世紀の身体論を巡るさまざまな議論が提起してきたものでもあるのだが、そのなかで、私という領域をただちに精神性に収めるのはおかしいのではという見方が生じてくる。確かに身体「も」また私である。だがそこでの身体は機械的なのではなく、一方では人間的でもあり、他方では動物的でもある。人間的でもあり動物的でもある身体において、私とはどういう位置をもつのだろうか。ここでは、先の第一の問い、すなわち、人間の特性と動物の特性との違いと、私があることと、私が（動物的で進化的なものでもある）身体であることとの違いが、さまざまに絡みあいながら提示されてくることになる。

若干方向を変えてみる。精神科医の木村敏氏と話しあう機会があったときに、氏が、統合失調症の発症は圧倒的に思春期が多い、そしてそこでは性的な身体との向かいあいが重要なのではないかと述べられたことがある。

同様のことは、拒食症や過食症、食にまつわるさまざまな障害や事例にも関連することであるとともう。これはどうしてなのか。

性はもちろん生殖的な事例であるし、食は当然、

生き物を食べる（人間が食べるものの殆どは生きてものを殺したものである）という事実にかかわるものである。性や食は、身体が自己保存としても、あるいは世代間で維持されるためにも不可欠なものである。言い換えれば、これは私が私としてある条件をなしている。そしてこうした身体の果たす動きは、きわめて動物的なものにほかならない。

その段階で、ある種の病を発症しやすいというのは、逆に次のことを意味しているのではないか。すなわち、私とは思春期において、自分も動物の一種であることを否応なく自覚させられるものなのだとすることを。性的欲望とは、人文科学（精神分析にせよ、人類学にせよ）がよく語ってきたように、もちろん相当部分が人間的な幻想＝妄想によるが、とはいえ、生殖というその一点において、私であることには、自らが進化する動物の一種であることがかかわっている。拒食や過食が、どちらかといえば社会的な評価や他者関係のなかで生じることは否定しえないが、その根幹にあるのは、やはり身体がほかの身体を食べるという動物的な行為である。それは私が身体であるかぎり、受けいれざるをえない事態である。

しかし人間の側の特性は、実はこうした動物性をいささか受けいれがたくつくられている（その受けいれがたさは、やはり人間にしか存在しない多くの宗教性の発生起源となってきたのかもしれない。大抵の宗教では、性的な忌避、食の忌避がある。これは、自己の動物性を認めないことの極限であるともいえる。宮沢賢治にはその典型例をみることができる）。とはいえ、人間が普通に生きていくなかで、それを受けいれることは、いわば避けがたい。

動物的身体に直面することが容易に病につながるということは、いわばこれが素朴なカテゴリーの混乱に映るからだろう。一番こうしたカテゴリーの混乱にセンシティブな思春期において、問題が過大視されるのはそれとしてわかりやすいことでもある。

動物と人間の境界を巡る問いは、こうした境界面での動揺や錯綜を腑分けしつつみていかなければならないものではないだろうか。人間の知性や能力において人間を特定する方向は、先にも述べたように、ロボットの人工知能の研究等において、人間的特性を明示する契機にもなっている。だが人間のあり方のなかで、私が私であることにおいては、一面で

はその特性に反するように、動物性そのものが深くまわりついている。進化的な生物として想定される自分の身体なくして自分なるものは存在しない。そしてそうした自分なるものが発揮する人間的な特性もありえない。両者はいつも絡みあっている。

とはいいつつも、人間は何故か、自分のなかにある動物に目を背け、軋轢を生じさせる。それもまた人間が私という特殊な生命体としてあることのひとつの真実である。この矛盾そのものを描くことが、哲学にとっての重要な課題であるとおもわれる。

